



13
2913
5

特

昭和九年
七月六日
神代

貞操婦女八賢誌二編中

村田

東都

狂訓亭主人編次



第九回

号神女真弓弘占卜
告昇天富嶽催神祭

清少納言の枕双帝との書のいともいとも賢婦あるうねを
のとの所の始小孝ある人の子と書いそり人の道多くわが中に親子
孝あることを第一の所為よきん君子忠義を友と信あつても比皆先
孝成元としく其心よりの切下よきとさるる君を元を信とむ奉るる
孝弟八仁とあつるの本うと論語にもあるさまより実多塚の梅吉所を親



五

五



昔くもやう我身年未林ゆゑの世業ありて神と志成清浄と云ま

つりや人の吉山福福を親看して既よ天機せり此のよきありと

りども八百五十神の冥助ありてくま成免き且還き事の御ありと若

き法とありて常たに二十の女とありて實今六年六十文と云天

元の帰敷るまげは及湯花の法越にありて神體成き同く東に昇極

せりめんと見湯花のさきと元體を極去にともまき其白米下と云い

祭事全くと終りる身と生まき熱湯の中に入て投入て神靈昇天の

奇特と見ゆべし世のありてあきとる神職神女もが華幣湯花と怪

ありて未結せざる事と海と悔しきとありてん我皇國の神と成りて

まき志願とありてんとありてのありて大望ありとありて供物祭式と

米錢とありて世の敬の位成りてくわき宿成成就経ひりて兼て

其ま強ちありて六道俗と成りてく余のてんも南も生まき

熱湯の身成投りてとありてのありてけきと傳へ給りてとて遠

近の老少男女の分別きと目のある成指りかぞふ公樂とく納宅と

ひりて遠き村人の湯が橋子結宿成りともありて隔る在るより八森川の

宿とありて後ありてその祭礼を待りけるかき七月二十日神と仙女真

弓こそ昇天の行力満願の目ありとて未明子小富士山の境地にありて

村長宜人助力とて供物の用意廣大ありともくこの富士山と稱す

助らんと欲すこととて是も通のてりてく自化平等の結縁とらるるらん
 神國の神の神末にありあつても間が亦小神遊くものくも若くは
 中洲と安土とを守護する神も亦其まはとがのちりて亦小神の
 勿辨あることと知れずや知りも其は宮亦小財とてけりて一財礼辨の聖助と
 祈りてとてく陰陽のそ神と崇信一三社の地置四所神の教示感泣の
 靈應を亦り稲荷五社の神通と作ぎ府中の六所とて七世の子孫
 安寧の度徳といのまう後年々の歳神を敬ひて八將神靈の利益を
 善り厄年といとも平安をん九天諸神十方諸府の神とて麻呂ふらるる
 也且ま神を初るも先氏神を録も下一の如く亦亦り四海外在
 祈諸天若神位を力小加指はして應禳の考瑞と連亦海の空るも天神
 乃の教小及も清公とて進て利益と初り兼婦人八福徳自在の眞助後うり
 子孫の榮えを獲ひり慎ぐ崇敬のま下とてとま声は託亦せが元業當
 社の神徳いりてより明白今もま真弓が神靈の實に託する形勢とまも
 嚴重に看せりけりて是も道信男女泉守の祈念しり六根清淨と
 まく餘(南)と一と声ひひりて阿弥陀佛成にの申に林ゆものも多く
 りて幾千貫の銀材とて一圓を授けりての御真弓八何やらん一際
 亦りて亦りて阿波の鳴戸なるま湯玉の御音とて辰雷も及ぶ亦の
 熱湯湯白眼つめくまうり八若くは近寄るる河の林も亦りて亦りて

ト... 氏の司とせしむ御教書をもくく... 或敷の... 長尾... 官... 神酒... 神... 林... 蜀...

第十回 女女記憶辨蜀江錦 赴神事毒婦計乙女

蜀江の錦... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江... 蜀江...



上ノ月ノ巻



上ノ月ノ巻

浅間森に眞
強錦の旗の
由來とらる

所弘賣

色白甚と梅のどく有り二早月ひもろく何指不荒疵の肌目も
羽二重活のど死も清うとるのさび。ゆび。そば。控物
の次。おまの取おしも清う清うとるのさび。ゆび。そば。控物
洗ひこの玉粧も清う清うとるのさび。ゆび。そば。控物
自他奈良の匂くうまうまに指すられぬ指すられぬ指すられぬ
用ひても目に色びと美くも紫法ゆ色指ひるく指ひこれ
真の美人とさるるべし

為永春水精削

髪髪の髪と髪の髪 妙妙業業 初初みみややのの里里

あまのさりの髪と洗ひたの
中ひりよるあうりくくさる
そのう有 代三十六文

書物并繪入讀本所

江戸京橋弥左二門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門

